

# 日本語名詞表現の形態統語的性質に関する覚書： 人称素性の側面から\*

猪 熊 作 巳

## 1. はじめに

英語に代表される多くの印欧系言語と異なり、日本語は機能範疇が脆弱である、あるいは欠落している、といわれる（Fukui 1986/1995、Longobardi 2008他）。機能範疇の脆弱さによって、日本語の一連の統語的特徴が説明される。節レベルの現象としては、(1)のようなものが挙げられる。

- (1) a. 一致現象の欠落
- b. 多重主格構造（東京が家賃が高い）
- c. かき混ぜ現象（太郎が駅で花子に会った／花子に駅で太郎が会った）

名詞句構造に注目すると、日本語には以下のような特徴が観察される。

- (2) a. 冠詞の欠落
- b. 可算・不可算システムの欠落
- c. 単数・複数システムの欠落
- d. 類別詞（classifier）の多用
- e. 下位クラス（語彙名詞、代名詞、固有名詞）の区別の希薄さ

これらの諸側面、特に（2b-d）は統語分析上、相互に関連する現象であることは疑いないが（Chierchia 1998、Longobardi 2008など参照）、本稿では

特に(2e)について、これまで比較的注目をされていない現象についてデータを整理し、分析の方向性について方針を書き留めたい。以下に記述するデータから少なくとも得られる結論は、日本語においても語彙名詞類、代名詞類、そして固有名詞類はそれぞれ独自の形態統語的性質を備えていること、そして、その相違はこれらの要素の形式素性 (formal features) 上の構成にとどまらず、統語的階層構造にも及んでいることである。したがって本稿の観察が正しければ、日本語のような機能範疇が弱いとされる言語においても、その名詞句は豊かな階層構造を持っている、ということが示唆される (cf. Furuya 2004, 2008)。

まず第2節で語彙名詞、代名詞、固有名詞の三種が共通して示す特性を手短かに確認する。本稿の経験的な中核をなすのが第3節である。この節では、これまであまり注目を受けていない、あるいは周縁的な事柄であると捉えられがちな諸現象に目を向け、上述の三種の名詞類が、日本語においても形態統語的に異なった性質を持つことを明らかにする。この議論にとって重要性を帯びるのは、鈴木 (1973) が指摘した、「自称詞」、「対称詞」と呼ばれる語彙グループである。日本語の名詞要素のなかで人称代名詞の位置付けが不明瞭になる理由の一つがこの語彙グループの存在にあるが、典型的人称代名詞の振る舞いと、これら称詞グループの振る舞いの並行性を考慮すると、人称素性 (Person features) の随意性、という観点から日本語と英語の違いが浮き上がってくることになる。したがって第3節の議論は、人称素性の統語的位置付けを再考する必要性を訴えるものとなる。本稿の目的上、包括的な分析案を提出することはできないが、第4節で本稿の観察をまとめ、今後の分析への理論的意義を指摘する。

## 2. 日本語名詞表現の諸特徴：並行性

よく知られているように、日本語には英語のように形式化された冠詞や限定詞の類 (便宜上本稿ではD要素と呼ぶ) が存在しないため、D要素との共起可能性によって語彙名詞、代名詞、固有名詞を区別することはでき

ない。<sup>1</sup>

- (3) a. (あの) 学生  
 b. (あの) 彼  
 c. (あの) 太郎
- (4) a. a/the student  
 b. \*a/the he  
 c. \*a/the Taro<sup>2</sup>

さらに日本語の代名詞、固有名詞は、語彙名詞と同様に形容詞などによる修飾が可能である。

- (5) a. 面白い {学生／あなた／太郎}  
 b. 昨日部屋にやってきた {学生／彼／太郎}
- (6) a. an interesting {student / \*he / \*Taro}  
 b. the {student / \*he / \*Taro} who came to my room

また、これらの要素は連結的複数辞「一たち」の付加が可能である。

- (7) 学生たち／あなたたち／太郎たち

上の節で述べた日本語機能範疇の脆弱さの観点からこれらのデータをみると、日本語においては語彙名詞、代名詞、固有名詞の区別がなされず、全てが語彙名詞として取り扱いうる、という印象を持つかもしれない。実際、日本語文法の入門書を開いてみると、代名詞・固有名詞に関する記述が皆無であったり（益岡・田窪 1992、寺村 1982）、文法的・統語的分類ではなく、概念的・意味的分類にとどまるものが多い（鈴木 2015：11）。<sup>3</sup>

このような印象に対し、次節ではInokuma(2008、2009、2011、2012)の観察を整理しながら上の三種の名詞的要素が示す文法的差異を報告する。

### 3. 日本語名詞表現の諸特徴：差異

3.1節では語彙名詞類と代名詞類、そして固有名詞類が、統語的に異なった振る舞いを示すデータを提出する。3.2節では鈴木（1973）の提唱する対称詞という範疇について吟味しながら、これらのデータを人称の観点から捉えなおしていく。

#### 3.1. 日本語名詞要素の三タイプ

上述したように、日本語名詞句には規則的な複数形が存在しない（cf. Nakanishi & Tomioka 2004）。複数を表す主語を要求する述語（「一しあう」や「集まる」など）との共起可能性から判断できるとおり、語彙名詞は語形変化や接辞を伴わなくとも、すなわち裸形のまま、複数指示が可能である(8a)。これに対し、代名詞類と固有名詞類は、裸形で複数指示を担うことができず、連結的複数辞「一たち」などの付加が必須である(8b-c)。

#### (8) 複数解釈

- a. 学生（たち）が殴りあっている。
- b. 彼女\*(たち）が殴りあっている。
- c. 太郎\*(たち）が殴りあっている。

これらの各タイプの名詞要素は、(8)のような形態・意味的側面にとどまらず、統語的な生起環境に関しても違いを示す。第一に、いわゆる「代名詞一名詞」構造（Postal 1969）における第一要素（ $N_1$ ）には、語彙名詞類は生起できない(9a)。

#### (9) 代名詞（ $N_1$ ）一名詞（ $N_2$ ）構造： $N_1$ への生起

- a. \*学生たち若者が騒いでいる。
- b. 彼女たち若者が騒いでいる。
- c. 太郎たち若者が騒いでいる。

(9a-b)の対比だけを取ると、これはPostalが指摘した英語例と並行をなすようにみえる(10)。

- (10) a. \*students youngsters  
b. them linguists

さらにこの構造が複数制約を示す、という点においても、日英語は共通している(11-12)。

- (11) a. \*I linguist  
b. we linguists  
(12) a. \*私言語学者  
b. 私たち言語学者

一方で、(9c)から明らかなように、日本語においては $N_1$ 要素に「固有名詞+たち」の生起が可能で、英語と対比をなす。詳細な統語的分析に立ち入らずとも、(9)の各例から、語彙名詞類に対立するクラスとして代名詞類と固有名詞類が認定されることが示唆される (Inokuma 2009、2011)。

この二項対立を支持する証拠としてさらにInokuma(2008)は、「Nのひと」という連鎖におけるN位置への生起可能性の差異を観察している(13-14)。

- (13) N-のひと  
a. 学生の人が訪ねてきた。  
b. \*彼女の人が訪ねてきた。  
c. \*太郎の人が訪ねてきた。  
(14) a. 学生が訪ねてきた。  
b. 彼女が訪ねてきた。  
c. 太郎が訪ねてきた。

日本語の統語研究において、「ひと」という名詞要素が特別な注意を受けることは少ない。しかし(13a)の例から明らかなおと、この要素は $N_1$ がすでに[+human]を指示する要素であっても、それに後続して現れることがある。逆にいえば、(13a)において「ひと」が果たしている形式的・意味的機能は皆無といえる。<sup>4</sup>このことは、(13)における「のひと」を削除した例(14)でも文法性に差はないことから確認される。この意味において、「ひと」という名詞要素は(少なくともこの用法においては)形式名詞、あるいは虚辞的名詞とみなすことができよう。一方で、(13b-c)と(14b-c)の対比によって了解できるとおり、代名詞類や固有名詞類は虚辞的名詞「ひと」の生起を認可しない。

ここまでの観察により、日本語名詞要素は形態統語的に二つのタイプに分類されることが確認された。

#### (15) 日本語名詞要素の二タイプ

- a. 語彙名詞類
- b. 非語彙名詞類

この対立はKripke (1980) 的な名詞の意味区別を想起すると納得のいくものかもしれない。すなわち語彙名詞類はその意味としてproperty (特性)を指し、その指示対象は集合となるのに対して、非語彙名詞類はpropertyを指さず、したがって内包(intension)も持たない。<sup>5</sup>このような言語哲学的思索の結果提案された区別が統語上の差異とも連動しているという事実は、Longobardi (1994) や、最近ではHinzen & Sheehan (2013: 特に第4章) に代表されるような、名詞句内部の統語構造が意味解釈へと直接的に反映される、というアプローチを支持するものである (Inokuma 2011)。

それでは、(15b)の非語彙名詞類はこれ以上下位分類の対象とならないのだろうか。言い換えれば、代名詞類と固有名詞類は、日本語統語上、区別する必要のないものなのだろうか。この点について、Inokuma (2011、2012) は日本語の形容辞 (epithet) とそれに関連する表現に着目し、この

二者もやはり互いに異なった統語的性質をみせることを報告している。

Inokuma (2012) が注目したのは、「やつ」や「ばか」といった、見下し・軽蔑の意味を付加する要素を伴った表現である。これらの要素は、上述の「ひと」と一見非常に似た統語的分布をみせる(16)。

- (16) a. 学生 {の人／のやつ／のばか} が質問に来た。  
 b. \*彼女 {の人／のやつ／のばか} が質問に来た。

しかし興味深いことに、固有名詞と共起しうるという点で、「やつ」や「ばか」は「ひと」とは異なった振る舞いをみせる。

- (17) a. \*太郎のひとが質問に来た。  
 b. 太郎のやつが質問に来た。  
 c. 太郎のばかが質問に来た。

整理すると、「Nのばか」、「Nのやつ」といった連鎖において、N位置は語彙名詞と固有名詞は許容するが、代名詞は許容しない。

- (18) N-のばか／やつ  
 a. 学生のばか／やつがまた遅刻した。  
 b. \*彼女のばか／やつがまた遅刻した。  
 c. 太郎のばか／やつがまた遅刻した。

同様のパターンは複合名詞化においても観察される。<sup>6</sup>

- (19) 「ばかN」複合  
 a. ばか学生がまた遅刻した。  
 b. \*ばか彼女がまた遅刻した。<sup>7</sup>  
 c. ばか太郎がまた遅刻した。

さらに、役職や肩書き、親族名称といった、いわゆるtitle表現 (cf. de Swart et al. 2007) との共起可能性という側面では、語彙名詞類、代名詞類と対立する形で、固有名詞類のみが抽出される。

- (20) a. \*喫煙者先生／喫煙者部長／喫煙者おじさん  
 b. \*彼女先生／彼女部長／彼女おばさん  
 c. 太郎先生／太郎部長／太郎おじさん

(20c)ではさらに、(19c)の「ばかN」複合と異なり、固有名詞類が先行要素となっている点にも注意が必要である。複合名詞の内部構造を形態部門に帰すべきか、統語部門に帰すべきかは議論の的となっているところではあるが、少なくとも、これらの現象に構造的分析が必要となることは間違いない。

(17)から(20)に至る議論を整理すると、日本語の名詞要素において、語彙名詞類・非語彙名詞類の区別(15)のみならず、さらに非語彙名詞類を、代名詞類と固有名詞類とに形態統語的に区別する必要性が示唆される。

- (21) 日本語名詞要素の形態統語的下位分類
- a. 語彙名詞類
  - b. 非語彙名詞類
    - i. 代名詞類
    - ii. 固有名詞類

### 3.2. 人称効果と自称詞・対称詞

上の議論では、英語に代表されるヨーロッパ系言語に観察される名詞要素の三分類をモデルとし、日本語においてもそれに並行する現象が観察されることを指摘した。しかし、特に日本語の代名詞類を分析するにあたって考慮に入れなければならない特性として、鈴木(1973)が「自称詞・対称詞」と呼んだ概念が挙げられる。第1節で指摘したとおり、日本語名詞

類の特徴として、名詞的要素の下位区分の希薄さが指摘されてきた。これは一つには、表面上明らかに語彙名詞類と思われる要素が一人称や二人称を指す機能を担いいうること、また逆に、典型的な人称代名詞と思しき要素が、実際の会話ではあまり頻繁に用いられない、という事実に基づいている。

(22) 二人称を指示する語彙名詞類：

(先生や上司、年長者などに対して)

- a. #あなたは次の日曜日おひまですか。
- b. {先生は／部長は／おじさんは} 次の日曜日おひまですか。

(23) 一人称を指示する語彙名詞類：

(子供や年少者などに対して)

- a. ?私は／僕はいま工作中なんだ。
- b. パパは／おじさんは／おまわりさんはいま工作中なんだ。

このような事実を受け、鈴木（1973）は日本語の分析において、ヨーロッパ言語的な人称代名詞類を仮定することに異を唱え、会話の参加者を包括する概念として「自称詞」と「対称詞」という分類を提案している（以下、この二つをまとめて「称詞」と呼ぶことにする）。鈴木自身の関心は称詞使用に課される文化的・社会的制約に向けられており、それ自体非常に興味深いものであるが、本稿ではこのような言語使用を可能にしている文法的側面に集中して議論を進めることとする。

称詞の議論を始めるにあたってまず確認しておかなければならないことは、タイプとトークンの区別である。本節の文脈に照らして述べなすなら、タイプとは「称詞として用いることのできる語彙名詞類」を指し、トークンとは「実際にその語彙名詞類が称詞として用いられている個別例」を指す、ということになる。例えば(24)が示すとおり、「先生」という語彙名詞は称詞として用いることが可能であるが、非称詞として用いることも、つまり三人称を指すことも、当然可能である。

## (24) 教室での会話：

- a. 一人称として  
先生の話をよく聞きなさい。
- b. 二人称として  
先生はもうお昼ご飯食べましたか。
- c. 三人称として  
先生に見つかったら怒られるぞ。

このような場合、「先生」という語彙項目は、称詞として用いられうるタイプであり、(24a)や(24b)のような例は、「先生」という語彙項目が称詞として用いられているトークンである、という。

(24)のような例が示しているのは、少なくとも日本語において、人称に関わる情報、あるいは素性 (feature) は、語彙項目そのものに記載されているわけではない、ということである。言い換えれば、[person] 素性は随意素性 (Chomsky 1995 : 231) であり、レキシコンから統語部門に取り出される時点 (Chomsky 1995 の用語でいえば Numeration の段階) で付与される素性であると考えられる。これが正しければ、Chomsky (1995 : 231) が英語を例に述べている、人称素性は語彙名詞の内在素性 (intrinsic feature) である、という言明には但し書きが必要となり、この素性の随意性について言語間変異を認める必要が出てくる。<sup>8</sup>

これに対する一つの反論として、そもそも日本語において人称素性は形式素性 (formal feature) ではなく、したがって統語演算の対象ではないため、(24)のような差異は語用論的処理によって説明されるべきである、という方向が考えられるかもしれない。しかし仁田 (1991) などが報告しているように、日本語においても主語と述語の一致現象 (agreement) と考えられる例は存在する。<sup>9</sup>

- (25) a. 私はもう帰りたい。
- b. \*太郎はもう帰りたい。

- (26) a. \*私はもう帰りがっている。  
 b. 太郎はもう帰りがっている。  
 c. 太郎はもう帰りたいと思っている。

願望を表す助動詞「～たい」は、その主語に一人称を指示する名詞句を要求する。対して主語が三人称の場合は「～たい」は許容されず、「～たがっている」が生起するか、あるいは(26c)のように「～たい」をさらに埋め込む必要がある。これを称詞としての「先生」に適用すると、(27)のとおり、「私」のような典型的一人称代名詞と同様の振る舞いをみせる。

- (27) 自称詞として  
 a. 先生はもう帰りたい。  
 b. \*先生はもう帰りがっている。

また、授受を意味する補助動詞「～てあげる」はその主語に一人称を要求するが、自称詞としての「先生」や「お父さん」は「～てあげる」との共起が可能である。

- (28) 自称詞として  
 a. 私が手伝ってあげよう。  
 b. {先生が／お父さんが} 手伝ってあげよう。

逆に、「～てくれる」は原則その主語に三人称を要求するが、称詞はこれとは共起しない。

- (29) a. {彼が／田中君が} 手伝ってくれた。  
 b. \*私が手伝ってくれた。

- (30) 自称詞として  
 \* {先生が／お父さんが} 手伝ってくれた (cf. 先生が手伝ってあげた。)

二人称を指示する対称詞用法においても同様である。いわゆる命令文においては、その主語は定義的に会話の聞き手、すなわち二人称である。日本語においても英語においてもこのタイプの文では明示的な主語は義務的ではないが、文脈上の要請がある場合は主語が明示されることがある。

- (31) a. こっちに来ないでください。  
 b. あなたはこっちに来ないでください。  
 c. \*{私は／彼は} こっちに来ないでください。

自称詞の場合と同じく、対称詞においても、命令文主語に課される人称制限は適用される。称詞として生起しうるタイプには個別的 (idiosyncratic) な制限があり、例えば同義語ペアであっても「先生」は称詞タイプである一方、「教師」は称詞としては用いられない。これを踏まえると、(32a)と(32b)のコントラストは人称制限の一種であることがわかる。

- (32) 対称詞として  
 a. 先生はこっちに来ないでください。  
 b. \*教師はこっちに来ないでください。

英語でも、話者が自身のことをDaddyやthe present authorなどで呼称する用例は観察される (Collins & Postal 2012)。ここで観察している日本語名詞要素の一連の事実は、まさにCollins & Postal (2012) がimpostersと名付けた要素を想起させる。彼らのいうimpostersとは、例えばDaddyやthe present author、あるいはYour Majestyなどのように、一見したところ三人称にみえるにも関わらず、文脈上の指示的には話者自身 (一人称) や相手 (二人称) を指す要素のことをいう。

しかしこれらの要素が主語として生起した場合、動詞は三人称に一致するという点で、日本語例とは対照的である。

- (33) 子供に対する父親の発言：
- a. Daddy wants to go home now.
  - b. \*Daddy want to go home now.
- (34) a. The present author assumes that ...
- b. \*The present author assume that ...

この日英語の違いを考慮すると、再び議論が振り出しに戻るような印象を抱く向きもあるかもしれない。結局のところ、日本語の名詞句において人称の区別は形式的、つまり形態統語的にはなされておらず、(25)から(30)のような対比は、いわゆる意味的一致 (semantic agreement : Corbett 2006 など)、あるいは文脈に依存した効果にすぎないように思われるからだ。そしてこのような特徴こそが、そもそも日本語の名詞要素における機能範疇の希薄さの証拠ではなかったか。

この疑問に対してはいくつかの回答が考えられる。意味的一致の代表例としてよく知られる現象は、イギリス英語における集合名詞の数に関わるものである。直観的に述べると、familyやteamといった集合名詞は、それを一個の集合体として取り扱う場合には単数として(35a)、その構成員一つ一つに関心が寄せられる場合は複数として扱われる(35b)。

- (35) British English
- a. My family is rather large.
  - b. My family are all fine.

であれば、英語では数についてみられる意味的一致という現象が、日本語では人称についてみられる、ということになる。この視点自体は興味深いものだが、しかしもしこの二つが並行的な現象だとすると、英語という機能範疇が豊かだと目される言語において意味的一致が存在することとなり、上記の推論、すなわち「機能範疇の希薄な言語であるがゆえに、意味的一致が可能である」という形式の推論は成り立たない。

さらに、現在の生成文法理論の枠組み（Chomsky 2004、2008、2013）において意味的一致現象を説明するなら、上述のような直観的な説明は採用できない。(25)や(26)、あるいは(35)の各例は、動詞の屈折形態が主語の指示対象によって制限を受ける、という事実を示している。一方現在の枠組みでは、動詞の形態を決定するのは統語部門において形式素性（formal features）間で成立する一致（Agree）関係であり、意味解釈は統語部門の出力をもとに得られる、と考える。意味的一致現象が、もし形式素性でなく意味素性（semantic features）によるものであるとすれば、その関係が動詞の屈折形態に影響を及ぼすことは考えにくい。動詞の形態に影響を及ぼしている以上、それは統語部門にとって可視的な現象であるはずである。すなわち、称詞としての語彙名詞類は、統語上一人称・二人称素性を備えていると考えざるをえない。このような観点に立てば、日本語称詞の特殊性は、以下のように述べることができるかもしれない。

(36) 日本語の語彙名詞類にとって、人称素性は随意素性である。

本題に戻ろう。人称素性が統語的に意味のある素性であることを受け入れた上で、これらの称詞が前節で取り上げた各構文に用いられたときにどのような振る舞いをみせるか、より具体的には、これら称詞類が語彙名詞類と並行的な性質をみせるのか、あるいは典型的な人称代名詞類と並行的な性質をみせるのかを観察していく。まず裸形の複数解釈は、これを許容しない(37)。

(37) 二人称として

- a. \*先生が職員室に集まってください。
- b. 先生たちが職員室に集まってください。

これは非称詞として用いられた場合と強い対比をなす。

## (38) 非称詞（三人称）として

先生が職員室に集まっている。

「代名詞一名詞」構造の $N_1$ 要素に称詞を用いた場合、判断は若干の揺れをみせるようになるが、称詞として用いることのできない「教師」などの要素との対比は明らかである。

(39) 対称詞  $N_1$ 

- a. 先生たち大人はあっちの部屋で待っていてください。
- b. お父さんたち大人はあっちの部屋で待っていてください。

(40) 非称詞  $N_1$ 

- a. \*教師たち大人はあっちの部屋で待っていてください。
- b. \*父親たち大人はあっちの部屋で待っていてください。

(39)の容認度判断において重要なのは、ここで主語として生起している「先生たち大人」や「お父さんたち大人」が指示（denote）する集合のなかに、 $N_1$ 要素の記述に該当しない個体、例えば警察官（である大人）やお母さん（である大人）を含むことができる、という点である。言い換えるなら、ここでの「一たち」は累加的（additive）・画一的（uniform）な複数ではなく、連結的（associative）な複数である（Nakanishi & Tomioka 2004、中西 2010）。意味論的な詳細は脇におくとして<sup>10</sup>、「一たち」が語彙名詞類だった場合、一般にその名詞要素は累加的な複数を意味する。

## (41) a. 私たちが行きます。

（私たち＝話者＋誰か）

- b. 学生たちが行きます。

（学生たち＝複数の学生）

この観察が正しければ、(39)において問題の要素が連結的に解釈されうる

という事実は、ここに生起している「先生」や「お父さん」といった称詞が典型的な代名詞類と並行的な解釈を受けていることの証拠となる。<sup>11</sup>

一方で、(42-43)が示すとおり、これらの称詞タイプに入る語彙名詞類は、「代名詞一名詞」構造の $N_2$ 位置を占めることも可能である。

(42) 対称詞  $N_2$

- a. あなたたち先生には若者の気持ちはわからない。
- b. ?あなたたちお父さんには娘の気持ちはわからない。

(43) 非称詞  $N_2$

- a. あなたたち教師には若者の気持ちはわからない。
- b. あなたたち父親には娘の気持ちはわからない。

(42)の例における「先生」や「お父さん」が、非対称詞トークンとして用いられていることは明らかである。その証左に、例えば「あなたたち先生」が指示する集合は、全て「先生」の条件を満たす個体でなければならず、その集合に先生でないものを含むことはできない。当然ながら(42)の例は、(43)のとおり「教師」や「父親」のような非称詞タイプの類義語と同じ振る舞いをみせる。

事態は自称詞の場合も同様である。自称詞は「代名詞一名詞」構造の $N_1$ 要素にすることができ、かつ、その際の $N_1$ 要素は連結的な複数解釈を受ける。

(44) 警察官が迷子の子供に向かって：

お兄さんたち警察官がいるから大丈夫だよ。

対称詞の場合と同様、 $N_1$ 要素が指示する集合は「お兄さん」以外の構成員、例えば中年（の警察官）、をも含むことができる。

### 3.3. 称詞タイプとなりうる名詞クラス

本稿ではここまで、語彙名詞類のうちどのような要素が称詞として機能しうるか、という問題についての議論を避けてきた。例えば「先生」と「教師」は、意味素性的には同義語とみなしてよいと感じられるペアであるが、前者は称詞として使われうる一方、後者を称詞として用いることはできない。

- (45) a. 先生は君たちみんなに頑張ってもらいたい (よ)。  
 b. \*教師は君たちみんなに頑張ってもらいたい (よ)。

同じようなペアは、親族名称についても観察される。「お父さん」や「お母さん」は称詞として機能しうる一方、「父(親)」や「母(親)」は機能しない。

- (46) a. お父さんはあっちに行つててよ。  
 b. \*父(親)はあっちに行つててよ。

本稿の思考法に従うなら、これらの対比は称詞と非称詞間の形態統語的素性の違いを反映していると考えざるをえない。すなわち、「先生」のような語彙項目は随意的に [+person] 素性を付与されうる一方で、「教師」のような語彙項目にはそれができない、と述べることになるが、両者のクラスを規定しうるような特性は現時点では同定できていない。称詞タイプを構成する名詞クラスの一部は、de Swart et al.(2007) が能力名詞 (capacity nouns) と呼んだクラス(47)との類似性を感じさせるが、この二つのクラスには隔たりも大きい。<sup>12</sup>

#### (47) 英語

##### a. 能力名詞 (Capacity nouns)

teacher, manager, slave trader, computer scientist, doctor, actor ... 職業

Belgian, Malian, American ... 国籍

Catholic, Christian ...

宗教

## b. 非能力名詞 (Non-Capacity Nouns)

boy, genius, braggart, sneak, woman, child, hero, impostor, reader, smoker ...

(de Swart et al. 2007)

鈴木 (1973) は、話者の視点、あるいは社会的立場という観点から称詞の分布を記述しているが、鈴木 の基準のみでは(45)や(46)のような同義語間での対立は説明できない。現段階では、語彙項目の個別的特殊性として記述しておくことにするが、この問題に対する最終的な分析は、(48)の三タイプの名詞類を明確に区別するような特徴づけを提供するようなものでなければならない。

## (48) 称詞化可能性の三タイプ

- a. 義務的称詞：[+person] 素性を義務的に付与  
例：私、僕；あなた、君；彼、彼女...
- b. 随意的称詞：[+person] 素性を随意的に付与  
例：先生、おまわりさん；お父さん、ママ；太郎、花子...
- c. 非称詞：[+person] 素性の付与不可能<sup>13</sup>  
例：教師、学生、警察官；父（親）、姉...

## 3.4. 称詞トークンに付与される素性の値

もう一点、指摘しておくべきポイントがある。それは随意的称詞タイプの下位分類としての、自称詞タイプと対称詞タイプの区別である。ここまで、自称詞と対称詞の並行的な側面に着目しながら論を進めてきた。確かにこの二タイプは、人称制限上同様の振る舞いをみせる。しかし一方で、随意的称詞タイプのなかの全ての要素が自称詞・対称詞両方の機能を果たすわけではない。上でみたとおり、「先生」は自称詞としても対称詞としても生起可能だが、他の称詞タイプに目を向けてみると、このような語彙項

目は少ない。例えば「教授」のような項目は、対称詞としては生起可能だが、自称詞としては生起できない。

(49) a. 対称詞として

教授は何をお食べになりますか。

b. 自称詞として

\*教授はハンバーグが食べたい。

鈴木（1973）が指摘しているとおおり、このような自称詞の用法には社会的な制約が課される。簡単に述べなると、会話の相手が話者よりも目下の立場の場合、その会話の相手から規定した話者の地位名称によって自称詞を用いることができる、というものである。結果としてこのような自称詞の用例は会話の相手が目下の場合、典型的には子供の場合に限られることとなるわけだが、親族名称の領域では自称詞・対称詞の交替が頻繁にみられる一方で、地位名称（例えば「部長」や「社長」、「キャプテン」）では多くの場合、対称詞の機能に限られる。

人称素性を用いてこの状況を述べると、随意的称詞タイプの語彙名詞類のうち、親族名称を示すものは [1st]、[2nd] 人称素性を担うことができる。対して、地位名称を示すものは、[2nd] 人称素性は担うことができるが、[1st] 人称素性を担うことはできない。すなわち、一般的な傾向として、随意的称詞タイプには(50)のような含意的予測が成り立つ。<sup>14</sup>

(50) 随意的称詞タイプの人称に関する一般化

随意的に [1st] 素性を付与しうる語彙名詞類は、[2nd] 素性も付与しうる。

一人称と二人称の間にみられるこのような含意関係は、人称素性が階層的に組織されている可能性を示唆する（Bobaljik 2008、Cysouw 2003 など）。

### 3.5. 称詞化可能性と固有名詞

人称素性の付加としての称詞化現象の観点から、固有名詞類の振る舞いについて再び立ち戻ると、これらの語彙項目は一見不可思議な特徴を示す。(51)に示すとおり、固有名詞は随意的に対称詞としても、自称詞としても生起しうる。

(51) a. 非称詞として

花子はもう帰りたいがっている。／花子が手伝ってくれた。

b. 対称詞として

花子はもう帰りたいの？／花子はむこうで待っていなさい。

c. 自称詞として

花子はもう帰りたい。／花子が手伝ってあげる。

自称詞としての用法(51c)は若干子供じみた印象を与えるものの、自然発話ではよく耳にする表現である。であるとすると、固有名詞類、少なくとも人名は、随意的称詞タイプとして、「先生」や「おまわりさん」のような語彙名詞類とともに分類されることとなる。<sup>15</sup>

## 4. 理論的示唆：まとめに代えて

本稿では、日本語の名詞的要素にみられる人称効果という観点から、その形態統語的下位分類の必要性を示唆する証拠を提示してきた。ここで提出した現象群に対する理論的分析については次稿に譲らねばならないが、説明すべき事実を整理して、本稿を終えることにする。

第1節、第2節で紹介した、日本語名詞類における下位分類の不明確さ、という印象に対して、第3節ではまず、人称代名詞類、固有名詞類、語彙名詞類の三種が統語構造上区別される必要性を示唆する証拠を提示した(3.1節)。この節の議論の結果、(21)にまとめたような下位分類が存在することを明らかにした(以下に(52)として再掲)。

## (52) 日本語名詞要素の形態統語的下位分類

- a. 語彙名詞類
- b. 非語彙名詞類
  - i. 代名詞類
  - ii. 固有名詞類

3.2節では鈴木（1973）の観察に基づき、語彙名詞類や固有名詞類が代名詞的に用いられる事例（称詞化現象）について、特にそれがもたらす人称素性の随意的付与という側面から考察を進めた。結果をまとめると(53)のようになる。

## (53) 称詞化可能性と名詞クラスの対応

- a. 義務的称詞：人称素性を義務的に付与  
 名詞クラス：代名詞類  
 .....[1st] あるいは [2nd] を固定的に付与  
 例：私、僕；あなた、君...
- b. 随意的称詞：人称素性を随意的に付与
  - i. 自称詞・対称詞タイプ  
 .....[1st] あるいは [2nd] を随意的に付与  
 名詞クラス：固有名詞（人名）類；親族名称；一部の役職名称  
 例：太郎、花子；お父さん、ママ；先生、おまわりさん...
  - ii. 対称詞タイプ.....[2nd] を随意的に付与  
 名詞クラス：役職名称  
 例：総理、部長、社長、キャプテン...
- c. 非称詞：人称素性の付与不可能  
 名詞クラス：その他の語彙名詞類  
 ..... 値に関わらず付与不可能  
 例：教師、学生、警察官；父（親）、姉...

個々の語彙項目のレベルでのクラス同定は、鈴木（1973）が詳細に論じているとおり社会的・文化的要因が大きく関わっており、形式的アプローチになじまないものであるが、大まかな分布は(53)からみてとれよう。すなわち、一つの極に人称上固定された語類、つまり義務的称詞として代名詞類が存在し、反対の極には人称を付与することが不可能な語類、すなわち非称詞、として多くの語彙名詞類が位置する。人称の観点から眺めたときに、日本語名詞要素の特徴として際立つのは随意的称詞、というタイプの存在である。上で一致現象の証拠に基づきながら議論したとおり、これらの称詞は、意味的・文脈的に話し手あるいは聞き手を指し示すだけでなく、形態統語的にも人称素性を持っていると考えられる。

(54) 日本語の随意的称詞タイプ名詞類は、人称素性を付与されうる。

人称素性が、統語上どのように処理されるのか（例えばNやDに付与される、あるいは独自の範疇PersonPを形成する、など；cf. Kayne 2007）、そしてそれが本稿で提示してきた一連の統語的現象についてどのような影響を及ぼすのかなど、理論的分析の精緻化については積み残した点が多々あるが、これについては稿を改めて論じることとする。いずれにせよ、一見周縁的と思われるような細かな現象であっても、通言語的理論研究の一助になることは確かである。

## 注

- \* 本研究の成果の一部はJSPS科研費（基盤研究（C）：課題番号26370505：研究代表者中戸照恵）によっている。日本語データの判断に関しては、数名の日本語母語話者に意見を求めたが、最終的な責任は筆者のみにある。
- 1 本稿では、日本語の人称代名詞類の代表例としてもっぱら「彼（女）」を使用するが、特別な断りのない限り、他の人称代名詞（「私」や「あなた」など）も同様の振る舞いを示す。人称代名詞の定義に関する議論は、第3節の「自称

詞・対称詞」(鈴木1973)との関連において立ち戻る。

- 2 Taroと呼ばれる個人が複数知られている状況において、そのうちの一人を指示するような場合はこの用法が可能になる。
- 3 生成文法の流れのなかでは、特に束縛条件の観点から照応形、代名詞、指示表現が区別されるが(三原・平岩 2006: 31-33など)、この場合でも、固有名詞の分類に関する議論はない。ただしFuruya (2004, 2008)では、人称代名詞類と語彙名詞類の文法的差異が指摘されている。
- 4 ただし語用論的側面に注目すると、丁寧さの表現手段としての機能を有していると考えられる。

(i) a. 外国人に声をかけられた。

b. 外国人の人に声をかけられた。

母語話者の直観として、(i-a)に比べて(i-b)のほうが若干丁寧な印象を受けることは間違いないが、このような語用論的側面については本稿では立ち入らない。

- 5 これはラッセル的な固有名詞の記述的分析に対立する方向性である。
- 6 ヤツN複合は、Nのタイプに関わらず許容されない。これはさしあたり、ヤツという要素の概念的希薄さによるものと考えておく。
- 7 いうまでもなく、ここでの「彼女」は「ガールフレンド」という意味ではない。このような語彙名詞的な解釈を受ける「彼女」は「ばかN」複合が可能で、「ばか彼女」は(someone's) poor girlfriend程度の意味になる。
- 8 この仮定は翻って、「私」や「あなた」といった、典型的な人称代名詞と目される語彙項目における人称素性の随意性に関する疑問を引き起こす。すなわち、もし日本語のレキシコンにおいて人称素性が画一的に随意素性として記載されているのであれば、これらの語彙項目に関しても人称は内在的には指定されていない、という帰結をもたらす。とすると、少なくとも人称素性という側面においては人称代名詞類と語彙名詞類を素性構成上区別することはできないという、一見本稿の主張に反する結論が導かれることとなる。

この問題については、二つの解決可能性が考えられる。一つ目は、本稿が提案している三タイプの名詞類を区別するのは(人称のような)素性構成ではなく、句構造上の生起位置、あるいは範疇上の性質である、とする考えである。後述するとおり、これらの要素が句構造上異なった位置に生起するのであれば、その違いを人称素性のみで還元する必要はない。詳しく議論する余地はないが、本研究は基本的にこの方向性を前提としている。本稿のタイトルに「形態統語的」と謳っているのはそのためである。

もう一つの可能性は、特定の素性の随意性について、言語内変異を認めるという考えである。すなわち、称詞タイプの語彙名詞類については人称素性

を随意的に付加することを許す一方で、典型的人称代名詞類にはこの素性を義務的・内在的に付与する、とする方略である。このような言語内変異は英語の数素性 (number feature) についても知られている。数素性は名詞に付与される随意素性の代表的なものであるが (Chomsky 1995: 231)、ある特定の名詞グループでは数は義務的・内在的に付与される。例えば、絶対複数 (plurality) と呼ばれる scissors や trousers のような語彙項目は単数形を持たず、常に複数形として生起する。すなわちこのグループにおいては、数素性 [+plural] が、内在的に指定されていると考えられる。本文この箇所以降の議論も参照のこと。

- 9 仁田 (1991) 自身は統語的メカニズムの詳細には立ち入っていない。ここでの一致とは、主語形式と述語形式の共起可能性に関わる制約として捉えておく。
- 10 実際には中西 (2010) は、このように一見累加的にみえる「一たち」も連結的な意味論によって説明可能であると主張しているが、ここではその詳細には立ち入らない。
- 11 (39-40)の例は一種の命令文であること、したがってここに生起する名詞要素は二人称であることも確認してほしい。
- 12 Inokuma (2008) は、本文(13)で観察したような「N-のひと」構造に生起する名詞クラスと de Swart et al. (2007) の能力名詞との類似性を指摘している。
- 13 さらに一般的には、この問題は三人称要素 (それが代名詞類であれ語彙名詞類であれ) の人称素性の取り扱いに関わる。すなわち、三人称要素は [3rd] という人称素性を持つのか、あるいはそもそも人称素性を持たないのか、という問題である。
- 14 この一般化は随意的称詞に限定されたものであることに留意してほしい。義務的自称詞、例えば「私」や「本官」などは、対称詞として機能しない。この事実は、人称素性が名詞類に付与される際には、その値までが指定されている、ということを示唆する。
- 15 ただしこの二種は、文脈上決定的な違いも持っている。語彙名詞類が自称詞として用いられる場合は、会話の聞き手は話し手よりも社会的な立場の点で下に位置する者である。一方、人名が自称詞として用いられる場合は、聞き手—話し手間の上下関係の存在は含意しない。これは本文でも指摘したとおり、人名を自称詞として用いる場合、その発話の多くは年少者によることが一因であると思われるが、検討を要する点である。

## 参考文献

- Bobaljik, Jonathan David (2008) “Missing Persons: A Case Study of Morphological Universals,” *The Linguistic Review* 25, 203-230.
- Borer, Hagit (2005) *In Name Only, Structuring Sense volume I*, Oxford University Press, Oxford.
- Chierchia, Genaro (1998) “Reference to Kinds across Languages,” *Natural Language Semantics* 6, 339-405.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2004) “Beyond Explanatory Adequacy,” in Adriana Belletti (ed.), *Structures and Beyond: The Cartography of Syntactic Structures, vol. 3*, 104-131, Oxford University Press, Oxford.
- Chomsky, Noam (2008) “On Phases,” in Robert Freidin, Carlos P. Otero and Maria Luisa Zubizarreta (eds.), *Foundational Issues in Linguistic Theory*, 133-166, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2013) “Problems of Projection,” *Lingua* 130, 33-49.
- Collins, Chris and Paul M. Postal (2012) *Imposters: A Study of Pronominal Agreement*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Corbett, Greville G. (2006) *Agreement*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Cysouw, Michael (2003) *The Paradigmatic Structure of Person Marking*, Oxford University Press, Oxford.
- den Dikken, Marcel (2006) *Relators and Linkers: The Syntax of Predication, Predicate Inversion, and Copulas*, MIT Press, Cambridge, MA.
- de Swart, Henriëtte, Yoad Winter and Joost Zwarts (2007) “Bare Nominals and Reference to Capacities,” *Natural Language & Linguistic Theory* 25, 195-222.
- Fukui, Naoki (1986/1995) *Theory of Projection in Syntax*, CSLI, Stanford & Kurocio, Tokyo.
- Furuya, Kaori (2004) “Us Linguists,” *MIT Working Papers in Linguistics 46: Proceedings of the Workshop on Altaic Formal Linguistics I*, 227-242.
- Furuya, Kaori (2008) “DP Hypothesis for Japanese “Bare” Noun Phrases,” *U.Penn Working Papers in Linguistics* 14, 149-162.
- Hinzen, Wolfram and Michelle Sheehan (2013) *The Philosophy of Universal Grammar*, Oxford University Press, Oxford.
- Inokuma, Sakumi (2008) “N-no Hito and the Syntax of Japanese Nominal Phrases,” *Linguistic Research* 24, 13-27, University of Tokyo English Linguistics Association.
- Inokuma, Sakumi (2009) “So-Called Pronoun-Noun Construction in Japanese: A New Perspective on Nominal Syntax,” *Linguistic Research* 25, 31-42, University of Tokyo

- English Linguistics Association.
- Inokuma, Sakumi (2011) "Syntax of Personal Pronouns and Proper Names, and the Notion of Direct Reference," *Linguistic Research* 27, 63-71, University of Tokyo English Linguistics Association.
- Inokuma, Sakumi (2012) "Redundant *Hito*, Polite *Kata*, and Derogative *Yatsu* in Japanese: Human-Denoting Light Nouns as a Window into Noun Phrase Structure," *Linguistic Research* 28, 75-110, University of Tokyo English Linguistics Association.
- Kayne, Richard S. (2007) "Several, Few and Many," *Lingua* 117, 832-858.
- Kripke, Saul A. (1980) *Naming and Necessity*, Harvard University Press, Cambridge, MA.
- Longobardi, Giuseppe (1994) "Reference and Proper Names: A Theory of N-Movement in Syntax and Logical Form," *Linguistic Theory* 25, 609-665.
- Longobardi, Giuseppe (2008) "Reference to Individuals, Person, and the Variety of Mapping Parameters," in Henrik Høeg Müller and Alex Klinge (eds.), *Essays on Nominal Determination: From Morphology to Discourse Management*, 189-211, John Benjamins, Amsterdam.
- 益岡隆志・田窪行則 (1992)『基礎日本語文法 改訂版』くろしお出版.
- 三原健一・平岩健 (2006)『新日本語の統語構造 ミニマリストプログラムとその応用』松柏社.
- 中西公子 (2010)「可算・不可算と複数の関連性 —「たち」の考察を通じて—」日本言語学会第140回全国大会. 筑波大学.
- Nakanishi, Kimiko and Satoshi Tomioka (2004) "Japanese Plurals Are Exceptional," *Journal of East Asian Linguistics* 13, 113-140.
- 仁田義雄 (1991)『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房.
- Postal, Paul (1969) "On So-Called 'Pronouns' in English," in David A. Reidel and Sanford A. Schane (eds.), *Modern Studies in English: Readings in Transformational Grammar*, 201-224, Prentice-Hall, Englewood Cliffs, NJ.
- 鈴木孝明 (2015)『日本語文法ファイル 日本語学と言語学からのアプローチ』くろしお出版.
- 鈴木孝夫 (1973)『ことばと文化』岩波新書.
- 寺村秀夫 (1982)『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版.